

市民が喜んで読める市史に

藤森三治

「福生から立川までの鉄道運賃は十六銭」・「西多摩郡の寺院数は百七十九」など、六〇年前の多摩のようすを知るうえで貴重な史料が、福生市郷土資料室から刊行されたことを新聞で読みました。

(60・10・31読売新聞) 昔の多摩のようすを理解するうえで、たいへん役立つものと期待されています。

これよりさきがけて、本市では、「福生町誌」から「福生市史」への編さんに着手していますが、その過程において、市史研究誌が刊行されたことは、たいへん喜ばしいことです。

福生市は、昭和一五年に町制を施行し、更に昭和四五年に市制を施行して現在に至っています。市制一五周年にあたり、市史研究誌が刊行されたことは、郷土の歴史、民俗、文化、自然について知り、郷土を愛し、郷土を理解するうえで貴重

な資料となります。

また、この研究誌が、より多くの市民に愛され、福生の歩みを深くみつめ直して、郷土への理解をいっそう深めるよい機会となることを願っています。

そこで、「福生市史」に載せてほしいことを、ざっくばらんに六年生児童にきいてみました。いくつかを紹介させていただきます。

(一) 福生の歴史や文化を分かりやすく、読みやすく書いてほしい。(唐沢めぐみ)

(二) 「福が生まれる町、福生」の名前が気に入っている。学校の屋上から山に見えるすてきな町、福生についてもっと知りたい。(丁野真知子)

(三) 多摩川兄弟の生まれた時から死ぬまで、漫画にしてのせたりすると、

小・中学生もみたがるのではないでしょう。福生の名前の由来や、昔からあるおとぎ話などをのせたら楽しく読めると思っています。(園部淳子)

(四) ぼくは、市内の学校のことをあまり知らないで、学校の自慢できることや、先生や子供たちのことを知りたいと思う。(望月稔史)

(五) 福生市に住んでいてよかったことは、祭りが多いことです。福生の祭りやあそびについて勉強したい。(鈴木慎一)

(六) 福生の歴史や文化のことを、子どもから大人まで喜んで読める本にしてほしい。(小井戸貴丈)

(七) わたしは、福生に住んでいて、ほんとうによかったと思っています。七夕まつりがあるし、学校には六小まつりというすばらしい行事があるからです。ほかの学校にあるおもしろい行事を紹介するのもよいと思います。(杉本いずみ)

(八) 福生市とぼくたち

ぼくたちの福生市。福生の施設や文化は、他の市にないすばらしいものをもっている。ぼくは、福生市に育った

ことをほこりに思っている。先日、「福生市史」にどんなことをのせてもらいたいかと、藤森先生がおっしゃった。その時ぼくは、各学校のすばらしいところ、いま自分がほこりに思っていることをのせればよいと思った。

たとえば、毎年六小でやる「六小まつり」がある。児童会が中心となり、五、六年生が力を合わせてお店をつくる。去年は、みんなから詩を募集して児童会の歌をつくったし、今年は六小音頭をつくった。一年生から六年生までのみこしが通学路をねり歩く。このようなことを、福生市史にのせて、福生の人に学校のことを少しでも多く知ってほしいと思います。

福生市史は、福生市民が全員読むべきものだと思うので、だれでもてがるに読めればよいと思います。そして、この市史をつくりながら、この福生をもっとりっぱな市にして、福生市に住む全員が、自分たちの市は自分たちの力という心をもってほしいと思います。そして、この市史ができることをほこりに思う人が一人でも多くなるよ

うな市民に育っていきたいと思います。
(草島子栄)

このように、アンケートや作文に見られるように、小学生から見た市史への要望の一端を知ることができました。

郷土を知るための史料を豊富に取り入れた専門的な市史、内容が分かりやすく、市民が気軽に親しめて、喜んでくれるような一般的な市史、大きくわけて二つくらいがよいと思われまます。また、児童向け教授用資料として、「昔の福生はこう

市史に対する子供達の要望

福生一中に新任できて、はやくも五年がたった。学生時代は都内に住んでいたが、福生は、よく通過するところであった。月に一度以上は青梅線にのって奥多摩や奥秩父の山々に、のぼっていた。そのせいか、すぐに福生という地域の中にはいっていったかと思っている。一教員と

だったよ」とわかるような、小・中学生向きの市史、あるいは、「まんが福生むかしばなし市史」といったものもおもしろいと思います。

市史が、専門書だけに終わることなく、そういう市史をつくる一方、対象は市民であるわけですから、興味をもって喜んでくれる市史であってほしいと思います。大変むずかしいことですが、市民が親しんで読める市史ができることを願っています。

(ふじもり・みつはる 福生六小教諭)

小林正治

して思うに、学校と地域の連携(地域に根ざした教育)がなければ、充実した学校教育は、成り立っていないのではないのか、と日まじし思うこの頃である。PTA活動をもり立てて、教員と親との絆を強くしていくことも、生徒を理解していく上で必要だが、地域をきちんと知ると

いうことも、「地域に根ざした教育」の一端であると思う。社会科学を教えるものとして、地域の歴史をきちんと把握していくことが、授業に、地域理解に結びついていくのだと思う。そうした点で、市民史の発行には、大きな期待をよせている。

さて今回、この原稿をかくにあたって、中学生が歴史をどういった目でみて、どの点に興味があり、地域のことをどの程度知っているか、そして、市民に対する生徒たちの要望や意見を書いてみようと思っている。(アンケートに関しては、四クラスの中で平均的な一クラスを抜き出して集計してみた。)

質問一、地理と歴史では、どちらが好きですか？

地理一人、歴史三四人。結果は歴史のほうが六人上まわっている。全国的には、歴史ぎらいの子供がふえているなかでは、まあまあといったところであろうか。

質問二、歴史では世界史が好きですか、

日本史が好きですか。
世界史三人、日本史二人。国際社会を反映してか、世界史に関心がたかい。教室の中では、世界の歴史と日本の歴史を比べたのがたのしい、などの声がかかれた。

質問三、日本史・世界史を問わず、歴史では何時代が好きですか。

(重複してもかまわない。)

縄文六人、弥生〇人、古墳一人、飛鳥一人、平安五人、鎌倉四人、室町四人、安土・桃山一人、江戸八人、明治二人、大正七人、昭和七人、ルネサンス一人、ヨーロッパ中世一人、文明のおこり一人。
この結果をみると、子供の興味は縄文、平安・室町、江戸、近現代に集中している。歴史の大きな変革期に子供の目が向いている。縄文に関しては、その生活。平安・室町にかけては、古代社会から中世封建制への変革。江戸時代では玉川上水や農民の生活。近現代では、横浜基地のこと。教室で子供達は、いくつか例を上げてくれた。

質問四、福生市の歴史については、何年生で勉強しましたか。どんな内容でしたか。

ほとんどの子は、小学校三年生で郷土史を学んでいる。学習内容に関しては、玉川上水、多摩川、昔の産業、人口のことなどであった。内容はともかく、小学校三年生でしか学習していないというのは、地域に対する認識がどうしても薄くなってしまっているのではないだろうか。地域の教材化という点で、市民史を活用していく必要性があり、今後の課題ともいえるのではないだろうか。

質問五、福生市にある古くからの建物・遺跡など、知っているものを全てあげなさい。

玉川上水、熊川神社、清岩院、その他ありそうでないな、というのが子供の実感であるようだ。市内の史跡マップなどの作成をしてほしい、との声も上がった。

質問六、福生市の歴史で知りたいこと、興味あることを書いて下さい。

これはいくつかあったが、代表的なもの

のをいくつかあげてみよう。「横田基地はなぜできたか。」「福生の名の由来」「いろいろな災害」「玉川上水のこと」「中学生らしいところでは、「福生のゆれいや迷信」などが多かった。特に横田基地に関しては四三人中、半分は書いてあった。やはり身近な問題として、考えているのだらう。

質問七、福生市の歴史の本をつくるが、どんな本にして欲しいか、その要望や希望。

代表的なものとして、「大きな字、絵や写真を多く使ってほしい。」「まんがが風にして欲しい。」「わかりやすく書いてほしい。」「どんな物がどこにあるかを書いてほしい。」「エピソードを入れてほしい。」「みんなのアンケートを大いに利用して歴史に親しみ深くなるような本にしてほしい。」などであった。

アンケートの集計に関しては以上でおわるが、全般的には、子供達にとっては歴史は、やはり身近な問題からといってゆくのがいちばん抵抗がないようにみえた。横田基地、玉川上水など、自分達が

生活してゆく上で係わり深いことを、市史へ積極的にのせてもらいたいと思う。

それから、身近な歴史ということで、市史のレジメ的な小冊子を子どもたちが要望している。やはり、誰が読んでも肩のこらない歴史の本というのは、子供も望むことだし、我々、歴史を学び教えるものにとっても、要望したいところである。なぜなら、誰にでも読めるということは、歴史に興味をもつ層がふえ、市民自身による郷土史発掘という、次の段階に発展することに結びついてゆくからである。私は最初、「地域をきちんと知ること」が学校や地域の発展につながるべくと述べたが、市史を市民自身の手によって編集してゆくことによって、地域の発展に大きく結びついてゆくのではないかと確信している。

(こばやし・まさはる 福生一中教諭)

郷土料理あれこれ ②

サツマ団子

サツマ団子といえば、フーツとためいきをつく人もいようが、今になってはなつかしいものであろう。このサツマ団子は、サツマイモを切干しにして粉にして、団子にしたものである。秋から冬にかけてサツマイモの切干しをつくり、春になってから粉に挽き、この粉をぬるま湯でこね、にぎってふかしたもので、見栄えは黒くて悪いが、甘くておいしかったものである。三月から六月頃にかけての茶摘み、養蚕時などのオチャヤスミ・オコジョツつまり間食によく食べられたものである。今日、サツマイモはかなり高価なものに変わってしまったが、くる日もくる日もサツマ団子では、いささか胸のやける話ではある。